
絢爛軍華踏録帳

ニャワ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

絢爛軍華踏録帳

【Nコード】

N2743G

【作者名】

ニャワ

【あらすじ】

それは、此処とは違う世界。けれども非常に似た世界。共通点は、同じ夢を見る人間がいた事。相違点は、丈に似合わぬ強大な力を持っていた事。そして、国を想うが故に破滅を願った男がいた事だった。……これは、どこからか流れ着いたどこかの世界の記録。

一序一

リンカニチゲンテイコク
燐華日元帝国。

世界の中心である東西四大陸から外れた^{キュウトウ}究東に位置し、その国土は細長い島々の連なりで成るだけの小さき国。

そのせせこましい領土の大半が険しい山地である上に、産業資源が寡少なのにも関わらず、この帝国が東二大陸を着実に侵攻、占領し、西二大陸の国々をも脅かすに至るには理由がある。

『現人神』の存在である。それは、儀式を経た末に神通力を得た人間を指す言葉で、帝国には“それ”が十を数える程はいるという。人の身でありながら、神の力を振るう人間を帝国は擁し、その力を以て大帝国へと成ったのであった。

これは、圧倒的な戦果を出した奇襲戦を皮切りに始まる大進撃から、唐突に全戦線に広がった衰退、そして、敗北を喫した帝国の歴史の内、『現人神』の活躍を記した帳である。

一 目 次

絢爛軍華踏録帳 目次

——第十神隊隊長 シンタイ 熾原 オキハラ 花杖 ノ頁
……其ノ御業、烈シヒ火焰ノ様相也

——第九神隊隊長 キリヌマ 霧沼 達士 ノ頁
……其ノ御業、飲ミ干ス海ノ如キ様相也

——第八神隊隊長 タチ 城 名幸 ノ頁
……其ノ御業、地ヲ震ワシ動カス程也

——第七神隊隊長 カラワ 空窪 聡晴 ノ頁
……其ノ御業、神風サエ起コス程也

——第六神隊隊長 ハチヤ 八谷 都舵和 ノ頁
……其ノ揺ラギ、者ノ内奥ヲ崩ス物也

——第五神隊隊長 ドウメイグウ 藤鳴宮 鶴羽 ノ頁
……其ノ羽、脳髓サエ揺ルガス物也

——第四神隊隊長 カサカギ 笠鉤 真 ノ頁
……物ノ理ヲ使役スル者也

——第三神隊隊長 メイフビラキ “冥府開キ” ノ頁
……奈落ノ口ヲ持ツ物也

——第二神隊隊長 カバネガエシ “屍返シ” ノ頁

……死ヲ覆ス物也

——第一神隊隊長 “時食ミ”^{トキハミ} ノ頁
……過去ヲ食スル物也

以下、帝国ニ背キ、敗北ヲ招イタモノヲ記ス

——燐華日元帝国軍参謀部 第二参謀 黒式^{クロシキ} 鉄治 ノ頁
……ソノ思想、真ニ恐ロシキ物也

——第十一神隊隊長 阿上^{アガミ} 伽夕 ノ頁
……世ニ存在スルモノ、全テ無ニ歸スモノ也

熾原 花杖 ノ頁

——第十神隊隊長 熾原 花杖
……其ノ御業、烈シイ火焰ノ様相也

東北大陸、内陸部。

幾つもの民族を内包する、複雑で分裂した国家、『ナカツク那割玖』の領土である。いや、領土である“はず”の土地。

何故なら今現在でさえ日元帝国の侵攻は続いており、那割玖軍は防衛線を下げる事はあっても、盛り返す事はないからだ。

それに引き替え帝国軍は、着実に進軍と占領を繰り返している。

そして、その帝国軍那割玖最前線に立つのは、十番目の『現人神』、
熾原 花杖である。

「たあいちちょう？」

那割玖、中部地方。鬱蒼とした森林が多い土地である。

そんな、昼間の太陽も遮るような薄暗い森を行くのは、十数人程で構成された一つの班。

だが、部隊を構成する最小単位である班という集団なのにも関わらず、たった一人、後ろを顧みず早々と進む者が。

そしてそれに追いつこうとする残りの者達の中でも、意地であろうか、先頭に行く二十半ば程の男が最前に声をかける。

「隊長、ちょっと待ってくださいよ。俺ら凡人にゃ追いつけない速さですよ、それ」

男はほとほとくたびれた、といった具合の声を出してはいるが、その足取りは案外しつかりとした速度を保っている。

「口を動かすのならば足を動かせ。こんな場所で戦闘に入る訳にもいかんだろう？」

振り返らずに厳しい言葉を返す最前の者は、有無を言わずといった具合で、むしろその速度を上げる。

「うへえ、隊長の御言葉はありがてえもんだなあ！　オラ、ためえら急ぐぞ！」

諦めと呆れが混じった皮肉を口にしながら、自分と後方にも櫓を飛ばすのは第十神隊副隊長。

そして、最前に行くのは第十神隊隊長であり、二人しかいない女性『現人神』でもある、熾原　花杖であった。

軍帽の下には肩まである艶やかな良質の黒髪と、常に寄せられている眉間にも関わらず魅するような整った目鼻立ちを持ち、鋭い切れ長の目に揃った、長い細やかな睫毛がそれを更に際立たせている。戦時でなければどこかの劇場に立って、その看板女優にでもなれるような彼女が、誰が帝国軍の要の戦力である『現人神』と思おうか。

「誰も思わない、や、思えないよなあ……」

「何をぼやいているんだ、副隊長？ 集中を切らすな！」

うっかり漏れた呟きが、運悪く隣にいた隊長に聞かれたようで、弁解の余地もなしに抑えた声量のお叱りと拳骨が飛んできた。

他の隊員には大抵は言葉でたしなめるのに、俺にだけは拳が飛ぶのは何故か聞いてみれば、『副隊長らしく示しをつける為』だそう。力の加減はしている、とは本人の談だが、『現人神』になった事による身体能力の大幅な向上にまだ慣れていない為か、殴られる身からすれば加減が出来ていないと思う。

その証拠になる、膨らみつつある頭の瘤をさすりながら、再び前方、緩やかな崖の下にある村落を見遣る。近代的ではない家屋が幾つかあるだけの、小さい村落だ。

「でも隊長、なにも俺ら第一班が偵察に出なくても良かったんじゃないですか？」

人の出入りを確認する為に双眼鏡を覗いている俺に対し、肉眼だけで村落を見ている隊長に声を掛ける。

残りの隊員は、村落に駐留していると思われる、那割玖の兵士に見つかからないよう木々の陰に隠れている。勿論、周囲への警戒も怠ってはいない。

「——敵軍がいるかいなか確かめ、いなかったらそのまま制圧すれば良し、いたらいたらずで、規模によってはやはり制圧すれば良いだけの事。どちらにせよ、私達だけで充分だろう？」

一息にそこまで説明すると、村落から見えない位置まで全員を下がらせる。

「最も、こんな小さな村に、私を退かせるような数は置かないとは見ていたがな」

顔は相変わらずの無表情だったが、自信に満ちた声色で悠々と言いつ放つ。だが、実際にその通りの為に言い返す言葉もない。

そう、事実、たった一人の『現人神』を足止めさせるだけでも一個大隊、場合によってはそれ以上は必要だという。

それだけの数の兵をこんな僻地に置く筈がなく、それならば都市部に集めるのが当然だろう。

一足遅れて集まった俺を確認すると、自然と輪になった全員を見渡し口を開く。

「規模は恐らく三、四十程度、多くて五十いるかどうか。明らかに私がいる分此方が有利だという事だ。

そこで、我が第一班のみで夜半、闇に紛れて制圧する。それまでは見張りを交代しつつ、各自体を休めておけ。以上！」

隊長らしい力強い言葉に、全員が揃った敬礼で応える。

それを見て満足したように小さく頷くと、これも小さく息を吐いた。誰にも気付かれないようにしたようだったが、副隊長らしく彼女のすぐ傍に控えていた俺には、それは溜め息だと分かった。

隊長が溜め息を吐くような人物だとは思っておらず啞然としている俺や、皆が交代の順を決める為に集まるのを尻目に、先程の村落が見える崖の方へと歩いていく。

——……まさか、身投げ？

いや、とすぐに思い直す。

まだこの、第十神隊副隊長という名誉ある位を拝命してから一ヶ月。短い期間だが、あの隊長がそんな愚かしく勇ましい行為をする人物ではないとは、嫌という程この身が理解している。それは、今も残る頭の瘤がそれを証明している。

他にも、隊員に接する態度や言動、今回のような作戦を考えつく所など、彼女の人格を知るにはむしろ一ヶ月は長すぎる気もしてきた。

「あれ、副隊長どこ行くんですか？」

そうは頭で考えていても、心の何処かにその演劇じみた単語が引っ掛かっている。女優云々など浮ついていたからか。

「え？ ああ……ちよつと、な。お前ら、適当に俺の分も割り振ってってくれ」

分かりました、と隊員の返事もそこそこに、不思議と足は彼女の跡を辿っていた。

「や、別に大丈夫だと思うけど……一応、ね」

誰からも訊かれていない事を、誰にも聞かれないうに呟いて、彼女の後を追うのを誰かに許してもらった気になって。

焦る足取りをなかなか抑えられず、錆びたブリキの人形のようにギクシャクした、早歩きと牛歩が混じった速度で向かう事にした。

熾原 花杖 ノ頁（後書き）

お読み頂いた通りの『戦記物じゃないんじゃね？』的な作品です。

これからは隊長ひとりずつ、幾つかの話数を重ねつつオムニバス形式に進んでいきます。更新が遅いのは仕様です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2743g/>

絢爛軍華踏録帳

2010年10月10日17時08分発行